

以降の節では、この順番にそって、関連する質問項目の検討結果を記し、最後に結果を全体的にまとめていくこととした。

(辻 泉)

4. 分析結果(1) 遠隔＝社会領域の変容

表4-1は、遠隔＝社会領域に関して4件法で尋ねた質問項目への結果について、肯定的な回答の割合を経年比較したものである。

前回論文では、おおむねポジティブな内容の項目が減少し、逆にネガティブな内容の項目で増加が目立っていた。よって、社会の先行きの不透明感の増大や、それに伴うポジティブさの減少などが認められるということ、さらには、それが地方都市においてより目立ってみられる可能性が示唆された。しかしながらその一方で、「05年調査」

から「09年調査」にかけて、有意な地域差のみられる項目数自体はむしろ減少傾向にあり、総じて地域差のなくなりつつある可能性も示唆された。

こうした点に注目して結果を眺めてみると、前回論文で減少傾向が認められたポジティブな内容の項目で、その傾向が続いていることが分かる。

たとえば、「C6 人生には意味があると思う⁸⁾」についての肯定的な回答は、「90年調査」では、90.2%見られていたのに対し、杉並区の結果をみると「05年調査」では82.6%、「09年調査」では85.0%、「15年調査」では73.4%と、特にここ数年で大きな減少傾向がみられた(以降、こうした結果を、90年90.2%→05年82.6%→09年85.0%→15年73.4%と記すこととする。なお松山市の結果とは、「05年調査」～「15年調査」を通して有意差はみられなかった)。

表4-1 遠隔＝社会領域に関する項目⁷⁾ (単位＝%、肯定的回答の割合の合計)

変数名				変数ラベル	1990 (n=1538)	2005 (n=515)			2009 (n=558)			2015 (n=473)		
1990	2005	2009	2015			杉並 (n=266)	松山 (n=249)	χ^2	杉並 (n=308)	松山 (n=250)	χ^2	杉並 (n=259)	松山 (n=214)	χ^2
C1	q57.13	q55.11	q42.11	「死」について考えることがある (2015「死にたい」と思うときがある)	55.7%	78.3%	71.0%	n.s.	79.2%	74.7%	n.s.	32.0%	31.3%	n.s.
C6	q57.6	q55.4	q42.5	人生には意味があると思う	90.2%	82.6%	82.7%	n.s.	85.0%	82.7%	n.s.	73.4%	76.2%	n.s.
C8	q57.5	q55.3	q42.3	20年後の自分は幸せだ	79.5%	64.6%	53.2%	**	67.0%	64.5%	n.s.	70.7%	65.4%	n.s.
O1	q61.1	q60.1	q45.1	「現在の社会情勢」を知っていることは重要だ	90.2%	83.3%	70.2%	***	78.8%	79.2%	n.s.	83.4%	79.9%	n.s.
O2	q61.2	q60.2	q45.2	「現在の社会情勢」を知っているほうだ	55.1%	34.8%	27.1%	n.s.	30.3%	22.4%	*	29.3%	22.4%	n.s.
O3	q61.3	q60.3	q45.3	この時代に生まれてよかった	83.1%	79.4%	77.3%	n.s.	73.7%	71.2%	n.s.	77.2%	75.2%	n.s.
P1	q61.6	q60.6	q45.6	国際性が豊かな人になりたいと思う	85.8%	76.9%	63.3%	***	71.7%	62.2%	*	70.7%	63.1%	n.s.
P2	q61.7	q60.9	q45.8	社会のために、何らかの形で役立ちたい	88.6%	77.2%	79.8%	n.s.	84.1%	83.2%	n.s.	78.8%	77.1%	n.s.
P3	q61.4	q60.4	q45.4	日本に生まれてよかったと思う	88.5%	89.8%	93.1%	n.s.	93.5%	93.6%	n.s.	93.4%	94.4%	n.s.
R2	q61.8	q60.10	q45.11	「世の中の裏」をのぞいてみたい	72.8%	61.7%	57.5%	n.s.	67.8%	66.0%	n.s.	68.3%	60.3%	n.s.
R6	q61.9	q60.11	q45.12	世の中は見えない所で何ものかによって操られていると思う	60.9%	62.7%	62.3%	n.s.	70.4%	66.3%	n.s.	61.8%	61.2%	n.s.
o-3	q62.7	q61.7	q42.12	日々の生活にもっと確かな実感がほしい	64.9%	53.8%	64.9%	*	61.8%	60.0%	n.s.	57.1%	64.5%	n.s.
	q57.1	q55.1	q42.1n	現在の生活に満足している	-	59.8%	54.2%	n.s.	70.8%	65.6%	n.s.	76.1%	72.4%	n.s.
	q57.2	q55.2	q42.2n	友人(恋人を含む)との関係には満足している	-	71.4%	71.5%	n.s.	85.1%	78.0%	*	83.0%	78.5%	n.s.
	q57.7	q55.5	q42.6n	自分の人生はつまらない人生だと思う	-	16.9%	22.5%	n.s.	21.1%	26.8%	n.s.	27.4%	33.2%	n.s.
	q57.8	q55.6	q42.7n	この世の中はつまらなくて退屈だ	-	15.0%	19.3%	n.s.	16.2%	19.6%	n.s.	19.7%	22.9%	n.s.
	q57.9	q55.7	q42.8n	地方よりも東京のにぎやかな暮らしのほうが好きだ	-	59.0%	20.5%	***	67.2%	20.0%	***	56.8%	26.6%	***
	q57.10	q55.8	q42.10n	「日本の将来は明るい」と思う	-	19.5%	14.1%	n.s.	21.1%	14.0%	*	28.2%	27.1%	n.s.
	q61.5	q60.5	q45.5n	今、住んでいるまちが好きだ	-	82.3%	78.7%	n.s.	89.9%	88.8%	n.s.	87.3%	83.2%	n.s.

また「P1 国際性が豊かな人になりたいと思う」という項目についても、90年85.8%→05年76.9%→09年71.7%→15年70.7%と一貫した減少傾向にあり、同様に、「O2 「現在の社会情勢」を知っているほうだ」という項目についても、90年55.1%→05年34.8%→09年30.3%→15年29.3%とこれまた一貫した減少傾向にあるのがわかる。またこの二つの項目は、「05年調査」または「09年調査」において、松山市のほうが有意に割合が低かったのに対して、「15年調査」ではそうした地域差が有意ではなくなっているという点も特徴的である。

また「05年調査」から加わった項目の中で、ネガティブな内容のものとして、「q57.7 自分の人生はつまらない人生だと思う」についても、杉並区の結果をみると05年16.9%→09年21.1%→15年27.4%と緩やかな増加傾向にあり、松山市でも05年22.5%→09年26.8%→15年33.2%と同様で、いずれの年も有意な地域差はみられなかった。

こうした結果は、前回論文と同様に、社会の先行きの不透明感の増大と関連付けて理解することができようが、さらにそれが都市あるいは地方のいずれかに限られた状況ではなくなっていることが重要であろう⁹⁾。

一方で、一見矛盾しているようで興味深いのは、その他に増加傾向にある項目である。「90年調査」では尋ねていなかったため、比較が難しい点もあるのだが、たとえば「q57.1 現在の生活には満足している」という項目については、杉並区の結果をみると、05年59.8%→09年70.8%→15年76.1%と増加傾向にあり、松山市との間で有意な地域差もみられなかった。同様に、「q57.2 友人(恋人を含む)との関係には満足している」についても、05年71.4%→09年85.1%→15年83.0%とおおむね増加傾向にあり、こちらも「09年調査」を除いては、松山市の結果との間に有意な地域差はみられなかった。

これらは比較的ポジティブな内容の項目と考えられるが、さらに深く解釈すれば、先に触れたような「社会情勢」や「国際」に関するものが、より「大きな社会」との関わりとすれば、むしろそれらにおいて先行きが不透明化するほどに、「小さな身近な社会」での満足度が上昇すると考えることができるかもしれない。よって、一見変わった解釈に感じられるかもしれないが、「q57.10「日本の将来は明るい」と思う」という項目についても、杉並区において05年19.5%→09年21.1%→15年28.2%と増加傾向にあり、松山市と有意な地域差も見られなかった点については、ここでいう「日本」が「大きな社会」に関わるものというよりも、むしろ「小さな身近な社会」の延長線上に位置づけられるようなものとしてとらえられているのではないだろうか。この点は、さらにほかの領域の結果と合わせて解釈すると、より明確になるように思われる。

(辻 泉)

5. 分析結果(2) 対人性領域の変容

本節では親密な他者との関係性に注目して分析を行う。該当する質問項目が多いため、主に分析に使用した項目を中心に表を掲載する。

前回論文の内容を振り返ると、対人性に関わる全域において不透明化が進行したこと、それにより友人関係は相互理解よりも関係維持が優先されるようになり、家族関係でも両親の相互理解が困難である状況がうかがわれ、恋愛関係はその構造的な不透明さから全体的な撤退傾向がみられた。そして今回の分析結果を先取りしてまとめると、関係性全体の不透明感は維持されつつ、個々の関係性それぞれにおける撤退傾向のみならず、関係性に順位付けを行った上で、友人や恋愛などの不安定要素を含む関係から家族(定位家族・生殖家族)へと資源を集中する可能性が示唆された。